

フランス義務教育課程第3学習期の学習指導要領（フランス語）*

飯 田 伸 二

以下に読まれる文章は、2018年7月16日付『フランス国民教育省官報』第30号に公布され、同年新学期より施行されている「第3学習期学習指導要領」のフランス語に関連する箇所である¹。具体的には、第3学習期全体のあり方を規定する第1部、第2部の全文、および第3学習期で学ばれる個々の科目の学習内容、指導方法の詳細を記述した第3部「科目教育」における「フランス語」の全文である。第1部、第2部からは、義務教育課程、とりわけ初等教育後半（小学校4・5年）および中等教育第1学年（コレージュ1年）のあり方に対するフランス文部行政の問題意識を検証・考察するうえで重要な情報・知見を得ることが期待できる。第3学習期3年間のフランス語教育の詳細については第3部を参照願いたい。あえて、フランス語教育に関連する箇所全文を翻訳したのは、義務教育、フランス語教育に対する今日のフランス行政の問題意識を総合的に理解するだけでなく、場合によっては個々の施策からは認識しづらい根本的な理念を感得するには、学習指導要領全体の通読は避けられないと判断したからである。学習指導要領の分析については、第4学習期学習指導要領の翻訳を終えた後に取り組む予定である。

この学習指導要領の母体となっているのは2015年11月26日付『フランス国民教育省官報』特別号第11号に発表された「第2・第3・第4学習期指導要領」である。従来は学年ごとに構想・執筆されてきた学習指導要領に代わり、2016年度からは学習期ごとの学習指導要領が施行されている。つまり、現行学習指導要領は、旧学習指導要領のわずか2年後に施行されたことになる。抜本的な見直しではないものの、わずか2年で学習指導要領が改訂されることは異例のことである。しかも、改訂対象科目が、「フランス語」「数学」そして「道徳市民教育」に限定されたことは、これらの科目の改訂がいかに緊急を要したかを浮き彫りにしている。文部行政の並々ならぬ問題意識が感じられ興味深い。この背景には、2016年度から施行されていたコレージュ改革に批判的であった、エマニュエル・マクロンの大統領就任（2017年5月）が大きく関与していることは議論の余地があるまい。これは、同大統領より首相に任命されたエドゥアール・フィリップ内閣において、ジャン＝ミシェル・ブランケールを国民教育相に任命した人事からも明らかである。彼はとりわけ教育面では保守色が強かったサルコジ大統領の下、2009年から2012年まで学校教育局長として、教区行政の中樞を担ってきた人物だからである。

また、指導要領自体のあり方、方向性は2015年3月31日付政令^{デクレ}として公布された「知識・技能・

キーワード：フランス義務教育課程、国語、フランス語、指導要領、文学教育

* 本稿は2018年度科学研究費助成事業（研究種目：基盤研究C；研究代表者：飯田伸二；課題番号：18K02600；研究課題：フランスにおけるコレージュ改革の射程と実効性：国語教育の再編を中心に）の研究成果の一部である。

¹ 今回、翻訳に使用したテキストは、フランス国民教育省が運営する教育関係者支援サイト「エデュスコール」からダウンロード可能である。◀ https://cache.media.eduscol.education.fr/file/programmes_2018/20/0/Cycle_3_programme_consolide_1038202.pdf ▶ (accédé le 29 octobre 2019).

教養からなる共通基盤」によって規定されている。この文章の日本語訳としては拙訳が存在する²。また、学年ごとの学習指導要領作成を放棄し、3学年からなる学習期ごとの学習指導要領を採用した経緯・理由については、かつて若干の分析を試みたことがある。必要に応じ参照願えれば幸甚である³。

《翻訳》

第3学習期

第1部：強化学習期固有の特徴（第3学習期）

第3学習期は小学校後半の2学年とコレージュ第1学年を結ぶ。これは、知識・^{コンピテンシー}技能・教養からなる共通基盤獲得に向け、教育の継続性と学びの一貫性をさらに重視しての措置である。この学習期は二重の責任を負う。すなわち、第2学習期に始まり、今後の学習を条件づける基本的な学力（読む、書く、数える、他者を尊重する）の獲得を強化することである。そして、この学習期3年間の継続性、進捗を担保することにより、小学校からコレージュへの移行をより良好なものにすることである。

本学習指導要領は第3学習期修了時に期待される学力を定め、錬成される^{コンピテンシー}技能と知識を詳らかにする。授業は構成が行き届き、段階的で、明快でなければならない。学び方も児童・生徒の習得リズムに合わせて差異化されなければならない。彼らの学びの成功を促進するためである。本指導要領は、幾つかの科目について、実施にあたっての目印を提示している。学習期3年間における授業のテーマ配分を容易にするためである。なお、このテーマ配分は、学習期の教育上の計画や個別の条件（特に、複式学級）によって調整が可能である。

学習期中で、コレージュ1年は特別な位置を占める。この学年を通じ、生徒はコレージュのリズム、教育体制、生活環境に適応できるようになるからである。一方、この学年は小学4・5年で開始された学習の延長線上に位置する。第3学習期の学習指導要領を通じ、〔児童・生徒〕は科目として構築された知の世界に段階的かつ自然に入って行ける。同じく、科目独特の^{ランガージュ}言語、考え方、方法を理解することができる。これらの知は小学校では同一の教員によって担当される。小学校教員は複数科目を担当し、これら授業科目に共通する学力習得につとめ、共通基盤を構成する異なる領域を連携させることができる。コレージュ1年になると、これらの知の教育は専門科目を受け持つ複数の教員が行う。コレージュの教員は、科目間に築かれた共通テーマ領域と科目間の連携を通じ、基盤が定義する^{コンピテンシー}技能の獲得に協同して貢献する。

学びの諸目標

強化学習期としての第3学習期が掲げる目標は、何よりもまず、第2学習期において開始された基本的学びをすべての児童・生徒に対し、安定させ、強化することである。

第2学習期により、児童はフランス語で読み、書くことができるようになった。第3学習期はこ

² 飯田伸二「《翻訳》「知識・技能・教養からなる共通基盤」」、『Stella』（九州大学フランス語フランス文学研究会）、37号、2018年、19-42頁。

³ 飯田伸二「2016年のコレージュ改革：学級と科目の脱構築に向けて」、『国際文化学部論集』（鹿児島国際大学国際文化学部）、第17巻第3号、2016年、141-156頁。

これらの成果を強化しなければならない。読むこと、書くことを広範かつ多様に利用し、他の学びに活かすためである。学び全体の条件となる話しことばにも、引き続き絶えず注意が注がれ、これに特化した練習が行われる。総体的に、言語^{ラング}の習熟は依然として第3学習期の中心目標である。事実、第3学習期は、第4学習期に進級し、就学の継続に必要な学習成果を獲得するのに十分な読むこと・書くことにおける自律性を、すべての児童・生徒に対し保証しなければならない。

児童・生徒は現用外国語もしくは地域語を、早くも第2学習期第1学年から学び始めている。第3学習期では、この学習を継続し、あらゆる種類の言語活動において一定の運用能力レベルに到達し、言語活動の幾つかにおいてはより高い習熟レベルにまで育成することを目指す。

科学言語^{ランガージュ}に関しては、第3学習期は整数の組み立てと呼び方のシステムの学習を、特に大きな数について継続する。さらに、分数と少数に関する知識を導入する。第3学習期を通じて、数に関する事実の暗記と計算方法の無意識化を軽視せずに、四則計算の練習を継続する。学習した数学の概念は、これらの概念習得の証となる設問解答の際に十全に意味を発揮する。

同じく第3学習期は、私たちを取り囲むすべてのものを記述・観察し、特徴づけるあらゆる要素を定着させる。すなわち、幾何学的形態、特質、[ものに]結びついた大きさ、その大きさを表現するための数と単位である。

児童・生徒は、さらに固有の方法で科学言語^{ランガージュ}の基礎を習得し、これにより問題を言葉で表明・解決し、データを処理できるようになる。児童・生徒は、事物、実験、自然現象を表す多様な表象（図表、観察のスケッチ、模型等）を使用できるようになる。さらに児童・生徒は、さまざまな性質のデータを、表・図表もしくはグラフを使って整理できるようになる。これら表・図表もしくはグラフを児童・生徒は自ら制作し活用することができる。

芸術・美術・音楽の分野において、第3学習期では、主に表現することを目標にした活動から、児童・生徒による実践を通じた芸術的創造の手段・技術・方法の探究へ移行する。児童・生徒は学習した芸術言語^{ランガージュ}のコードに習熟し、制作された作品に対してより大きな注意、感受性を発揮できるようになる。児童・生徒は制作の当事者と出会い、制作現場を発見する。多様にして構造化された芸術的教養の習得は、第3学習期において多様な科目を横断して行われる芸術史の導入によって一層強化される。

体育・スポーツは特別な位置を占める。この科目では、身体・運動性・行動・各自の取り組みが学習の核心をなすからである。また、この科目は健康のための教育に対し中心的な貢献を果たす。身体の動きにかかわる問題との出会い、他者との出会いを通じ、また身体を使ったさまざまな活動・ゲームやスポーツ競技において、児童・生徒は第3学習期において、自身の身体の運動に関する可能性を継続して開拓し、自身の技能^{コンピテンシー}をさらに強化する。

これらすべての言語^{ランガージュ}を通じ、児童・生徒は自身を表現し、コミュニケーションを取るように励まされる。これらの言語の選択・使用について考えることができるようになる。フランス語、そして外国語もしくは地域語は観察・比較・省察の対象となる。児童・生徒は言語^{ラング}について論理的に考え、その論理をつづり、文法、語彙に適用する能力を身につける。同じく、児童・生徒は問題を解決するために、活用すべき方法についても意識的になる。理解のために使用する戦略は児童・生徒に明快に教授される。児童・生徒は、メタ認知的な能力を発達させ、最も確かな学習方法を選択できるようになる。

児童・生徒は、さまざまな資料源に慣れ親しむ。情報を探し、デジタル世界におけるこれらの情報の起源、妥当性を吟味できるようになる。これらの情報を処理すること、自分のものとすることは、読むこと・書くことの技能^{コンピテンシー}の発展と連携し、かつこの目標に特化した学習を通じて行われる。

自信と自在さを獲得することによって、児童・生徒は自律性を獲得し、個人学習をより効率的に行えるようになる。この自律性は、学びについて、そして要求された作業を行うために取るべき方法について考察できるようになることによっても獲得できる。

第2学習期により知識の獲得の第1段階が行われた。知識の獲得は第3学習期においても継続される。併せてさまざまな科目領域の学習も開始される。こうして、歴史・地理により、児童・生徒は自身が人類の長い時間の中に、そして自分たちが暮らす空間の中に刻まれた存在であることを意識するようになる。児童・生徒は、歴史的な考え方がさまざまな問いかけにいかにかえをもたらずかを発見し、歴史とフィクションの違いを学ぶ。地理では、視野を広げ、人間と社会が空間と取り結ぶ関係をさまざまな尺度で吟味する。これにより、児童・生徒は空間を個人的かつ愛着のこもったものとして表象することから出発して、世界の客観的な知識を段階的に獲得する。

第3学習期における授業科目としての理科と科学技術^{テクノロジー}の第一目標は、科学・科学技術に関する最初の教養を児童・生徒に身につけさせることにある。この種の教養は世界そして人類の重大な挑戦を記述・理解するうえで不可欠である。児童・生徒は理科そして科学技術に属する問題への説明・解決を提案することにより、世界を合理的に理解する方法を取り入れられるようになる。児童・生徒が知識・ノウハウを動員して複雑な作業を遂行する機会が段階的に導入される。

芸術、体育・スポーツ、そして文学の領域では、児童・生徒は相当数にのぼる作品を発見し、慣れ親しむよう、そして作品の制作と受容を関連づけるよう指導を受ける。このように、第3学習期は児童・生徒が有している能力、すなわち、自らの実践を時間と空間の中に据える能力、自身の立ち位置を芸術家の制作との関係において定める能力を伸ばし、構造化する。第3学習期は、体育、スポーツ、芸術にかかわる共通の教養の獲得を保証する。

一般的に第3学習期において、児童・生徒はより抽象的な思考に到達する。この抽象的思考は、複雑な作業において論理的に考える力を育み、その実現を容易にする。児童・生徒は責任ある行動を取り、さまざまな計画を通じ協働し、相当数にのぼる文書を創作・作文し、あらゆる類の成果物を産み出すように励まされる。

第2学習期から設置されているメディア・情報教育により、知の多様な領域において、児童・生徒は問いを立てながら考えることに慣れ親しむ。彼らは観察のセンス、好奇心、批判精神、そしてさらに一般的に思考の自律性を磨くよう指導を受ける。コレージュ第1学年では、教師は第4学習期の学習指導要領のメディア・情報教育に関する箇所を参考にすることができる。

第2部

各授業科目からの〔知識・技能・教養からなる〕共通基盤への主な貢献

領域1 考え、コミュニケーションするための言語
<p>話しことばと書きことばの両方でフランス語を使って理解・表現する</p> <p>第3学習期における科目としてのフランス語の主な目的はフランス語の習熟である。フランス語の習熟は、話しことば、読むこと、書くことの3つの言語活動を通じて育成される。フランス語の習熟には、言語の学習も貢献する。これにより児童・生徒は言語のしくみについて考え、特にその規則性を理解し、つづりに関する一致の規則を守ることができる。</p> <p>言語の習熟にはすべての科目が寄与する。歴史、地理、そして理科では、科学的言語の学習と連携しながら、多様な形態の表現・表象を読み、理解し、さらに作り出すことに努める。</p> <p>一般的に芸術史および美術は、児童・生徒がこれらの分野特有の語彙・言い回しを身につけ、芸術作品および芸術言語を記述し、理解し、吟味できるように指導する。</p>
<p>外国語あるいは地域語を使って理解・表現する</p> <p>外国語もしくは地域語の授業は、5つの言語活動（聞いて理解すること、読むこと、切れ目なく話すこと、書くこと、反応し対話すること）を育成する。これらの活動を通じ、別の言語においても、話しことば、書きことばで理解し、コミュニケーションを取ることができようになる。</p> <p>フランス語では、言語の学習において、フランス語の言語システムと授業で学んでいる現用語のシステムを比較するよう努める。</p> <p>音楽教育では、外国語もしくは地域語で歌を学ぶこと、あるいは歌を真似ることは、学習中の言語の音の素材を模倣し、自分のものにする技能を育成する。</p>
<p>数学・科学・情報科学言語を使って理解し、表現する</p> <p>数学、理科、科学技術は、主に科学言語の習得に貢献する。数学において、科学言語は記数法の構築、そして数の四則計算の習熟を可能にする。これら記数法、四則計算は問題解答に活用される。科学言語はまた、私たちを取り囲むものの記述、観察、特徴づけを可能にする（幾何学上の形、特徴的な性質、ものそのものの大きさ、その大きさを表現するための数と単位）。</p> <p>理科と科学技術、また同じく歴史・地理では、科学言語を使い問題を解決し、データを処理・編成し、結果を読み・伝達し、もの・実験・自然現象の表象（図表、観察デッサン、模型等）を利用することができる。</p> <p>体育・スポーツは、時間、距離、速さについて学ぶことで、数学的なデータに具体的な意味を付与できる。重要なのは、あらゆる授業科目が科学言語の習得にかかわることである。</p>
<p>芸術・身体言語を使って理解し・表現する。</p> <p>全授業科目は表現し・コミュニケーションを取る能力の育成に貢献する。</p> <p>美術と音楽教育の役割は、造形作品の制作と歌によって、生徒に芸術言語の手ほどきをすることである。フランス語は、学習中の現用語同様、創作文を書くことと演劇を実際に演じることを、とりわけ重視する。</p> <p>体育・スポーツは生徒に非言語コード、個性的な身振り・手振りのコードを使って表現することを教える。児童・生徒は、運動的な動作あるいはアクロバチックな動作を行うことによって、もしくは表現的・芸術的・美的な狙いの表象によって、他者に感情・感動を伝える。児童・生徒はその選択・意図の根拠を説明する。</p>

領域2
学習の方法と道具

すべての授業科目を通じ、児童・生徒は自身の学習を能率よく組織し、学びの効率を高められるようになる。同じく、すべての授業科目は協働する能力の習得にも貢献しなければならない。そのために、あらゆる授業科目はデジタルツールの支援によるグループワーク、協働作業を推進する。同じく、計画を実現させる能力を助成する。この学習期では、科目横断型の計画が毎年実施される。すべての授業科目、特に地理・歴史・理科では、児童・生徒は必要に応じさまざまな資料源に慣れ親しみ、デジタル世界で情報を探索し、これらの情報の起源とその妥当性を吟味することを学ぶ。フランス語では、これらの情報を処理すること、自分のものにする^{コンピテンシー}ことは、読むことと書くことの技能の育成と連携しながら、個別の学習対象となる。コレージュ1年で、生徒は図書室〔情報・資料収集センター〕の利用法を発見する。司書教諭は授業時間中の説明により、情報のさまざまな編成の仕方（資料集の鍵となる構成要素、データベース、サイトマップなど）と基本的な情報探索法を生徒に周知する。

デジタルツールの技術の習得、規則の認識は理科と科学技術^{テクノロジー}の授業を通じて行われる。これらの科目で、児童・生徒はデジタル環境の構造を知り、さまざまな周辺機器とデジタルデータ（イメージ、テキスト、音声等）を処理するソフトウェアの使い方を学ぶ。数学では、児童・生徒は計算ソフトとプログラミング学習ソフトの使い方を学ぶ。芸術の分野では、創作のために、イメージ処理と情報検索のためのITツールの使用方法を身につけるよう指導を受ける。また、簡易なITツールを使って音声を加工することを学ぶ。現用語においては、デジタルツールを用い、生の現用語に触れる機会を増やすことができる。フランス語では、児童・生徒は書くためのツール（ワープロソフト、スペルチェッカー、オンライン辞書）を使えるようになり、音とイメージを含む資料の作成ができるようになる。

領域3
人と市民の養成

すべての芸術は、芸術活動を実践すること、作品に慣れ親しむこと、自身の感情・趣味を表現することによって、感受性の育成に貢献している。芸術作品との出会いと、作品の言語^{ランゲージュ}の分析を結びつける芸術史は、感性にかかわる側面と、理知的側面とを結ぶ特別な絆を形成する。フランス語では、作品を感覚的に受け入れることに努めると同時に、話し合い、その記録を読書手帳に残すことによって、表現する力・意見を表明する力を育成する。

授業科目のすべては、自身への自信と他者への敬意を育成することに貢献しなければならない。

体育・スポーツでは、とりわけ他者への敬意、差別の拒否、男女間の平等原理の適用を錬成することができる。現用語で発言し、教室で定期的に他者の意見を聞くことによって、外国語もしくは地域語の学習は、自身への自信、他者への敬意、学校・社会の問題に関与し、率先して行動する意義を強化し、学習言語に関連する文化へと〔学習者の知見を〕開く。こうすることで、ステレオタイプなイメージ、考え方を乗り越えることができる。

道徳・市民教育は主に規則と権利の理解を担当する。規則と権利は学校という枠組みにおける規則と権利でもあり、児童・生徒はこれらを尊重できるようにならねばならない。歴史では、フランス共和国と民主主義の建設に割り当てられたテーマを通じ、今日フランスにおいて享受されている自由と権利がどのようにして獲得されたのかを学び、市民に課せられている義務を理解することができる。理科と科学技術^{テクノロジー}では、とりわけ安全規則の遵守を学ぶ。

すべての授業科目は判断力の育成に貢献する。とりわけ歴史では、児童・生徒は歴史をフィクションから区別するようになる。数学は児童・生徒の意識に、証明と論証という考えを打ち立てることに貢献する。道徳・市民教育により、学校・社会の問題にかかわること、率先して行動することの意味を考察することができる。これらの行動は、計画^{プロジェクト}の実行、学校における共同生活への参加によって具体化する。また、この領域は学校生活から提供される機会に依拠するところが大きい。

領域4 自然の体系と科学技術の体系
<p>現実を観察することにより、科学と科学技術は生徒に問いと答えの探求を引き起こす。第3学習期では、科学と科学技術は3つの知識の領域を探求する。身近な環境を探求し、技術的、経済的、環境上の争点を特定する。技術的実践とプロセスを探求し、人間が食料の需要に応えることができるようにする。生体を探求し、進化の概念にしかるべき重要性を付与する、そして物質の特徴を探求し、その利用と関連づける。調査という考え方を取り入れることにより、科学と技術は、観察・記述すること、調査の段階を決めること、因果関係を打ち立てること、そしてさまざまな手段を用いることを児童・生徒に教える。児童・生徒は、自身の科学・科学技術に関する知識・技量を駆使して構想し、産み出すことを学ぶ。同じく彼らは、倫理的かつ責任ある態度を取ることができるようになる。さらに、人間活動が健康・環境に与える影響を自身の知識を使って説明できるようになる。</p> <p>同様に、地理は人間が暮らす地域の持続的発展が至上命令であることを児童・生徒に理解させる。</p> <p>体育・スポーツでは、体を動かすことを通じ、健康、生活上の衛生、頑張る覚悟といった原則（生理的原則）を自らのものにし、運動を司る原則（生体力学上の原則）を理解する。</p> <p>数学は、日常生活に結びついたものの大きさ（長さ、質量、体積、期間）とは何かをよりよく理解させてくれる。大数（整数）と少数を使い大きさの規模を表現することにより、あるいは、見積もること（長い距離、人口、期間、歴史上の時代の見積り）により、数学は世界の様相の表象を構築する。児童・生徒はさまざまなタイプの論理的思考に段階的に慣れ親しむようになる。自由な探求（手探り、試行錯誤）とデジタルツールの使用により、児童・生徒は問題解決へのアプローチができるようになる。現実のものから平面、そして立体の幾何学図形を学ぶことにより、単に形に関する知識を使うのではなく、幾何学の道具を駆使して、図形の特徴を確認し、その性質を確定することができるようになる。</p>

領域5 世界観と人間の活動
<p>時間・空間のなかで自身を把握することを児童・生徒に教えるのは主に歴史・地理の務めである。歴史の授業の狙いは、私たちの社会・時代において、児童・生徒のそれぞれに共通の教養と居場所を与えることだ。児童・生徒はフランスの歴史を形成する歴史的瞬間に問いかけ、フランスの歴史を他の歴史と比較照合する。その後、フランスの歴史を人類の歴史に組み入れる。地理の授業は、児童・生徒が世界を考える手助けをする。この授業を通じ、児童・生徒は空間に関するさまざまな経験をし、それらの経験を分析することができる。この授業はまた、自身の存在の地理的側面を意識するように児童・生徒を導く。それゆえ、地理教育は住民としての生徒の形成に参画している。</p> <p>数学、科学、科学技術の授業も同じく、時間・空間の手がかりを育成することに貢献する。児童・生徒に尺度の概念を獲得させ、さまざまな時間性を区別し、科学技術の進歩を歴史的、地理的、経済的、あるいは文化的文脈の中に位置づけるからである。この教育は科学あるいは科学技術的な問いを、経済、社会、文化そして環境の諸問題と関連づける。</p> <p>フランス語では、聞くにせよ読むにせよ文学作品に慣れ親しむこと、そして演劇や映画作品に慣れ親しむことが、児童・生徒の教養を育み、彼らの美的判断の形成に貢献する。さらにこうしたことが、児童・生徒と世界との関係を豊かにする。〔作品を〕文脈に位置づけるための初歩的知識が与えられ、児童・生徒は解釈ができるようになる。</p> <p>現用語の授業は、関連する国あるいは地域の文化的特性を教え、人文主義的教養を養成する。この授業は、児童・生徒が学んでいる言語の国・地域の歴史の痕跡や構成要素を発見するよう誘う。また、児童・生徒にさまざまな芸術的体験（美術、音楽、映画、子供向け文学、伝統や伝説等）をさせ、人間の多様な感受性に触れさせる。現用語の授業は、外国文化あるいは地域文化の生活様式、慣例と風習、価値を児童・生徒に意識させる。こうして、外国あるいは地域の文化は児童・生徒自身の文化と比較対照される。</p>

美術教育により、児童・生徒は作品を地域あるいは文化的エリアに結びつけている特徴を学ぶ。同じく、作品を歴史上の時代あるいは同時代、最近の時代あるいは遠く遡った時代に帰属させる特徴を、生徒に教える。この授業科目により、意図的なものと無意志的なもの、管理されているものと偶然の産物を区別し、これらが創造の過程で果たす役割を理解し、形式上の特徴と歴史的な文脈の間に関係を打ち立てることができるようになる。芸術史教育により、歴史的な事実の教育に、文化、その歴史と流通に対する感覚的認識が加わる。美術、音楽教育、フランス語において、児童・生徒は、選択された適切な表現方法を用いることによって、意図・感覚・感動の表現を体系的に行えるようになる。

体育・スポーツの授業では、児童・生徒は自らスポーツに関する教養を形成する。彼らは国民的・世界的な遺産をなす偉大な作品、とりわけダンスの分野の作品の意味と重要性を発見する。

第3部：授業（第3学習期）

フランス語

第2学習期では、読むことと書くことの習得が行われた。第3学習期では、読むこと、書くことをより広くかつ多様に駆使しながら、第2学習期における学習成果が強化されなければならない。話しことばは学習全体の成功の条件となり、書きことばの文化に触れる手段となる。それゆえ、話しことばには絶えず注意を払い、話しことばに特化した練習を行う必要がある。そもそも、言語の習熟は第3学習期においても中心的な目標である。コレッジ第1学年を第3学習期に統合することにより、すべての児童・生徒に読むことと書くことにおける十分な自律性を確保できるはずである。その結果、就学の継続に必要な学力を備えて第4学習期を開始することができる。

フランス語の領域は読むこと、書くこと、話しことばの諸活動を関連づける。これらの諸活動は定期的に行われ、量的にも十分である。さらに、これらの諸活動は、言語の学習（文法、つづり、語彙）により特化した関連活動によって補完される。言語の学習にかかわるこの活動により、言語のしくみを理解し、その規則を習得できるはずである。

話しことば、および書きことばによる表現、読むことはフランス語の授業において重要な地位を占める。これらは共通の文学的教養への第一歩を踏み出す文章^{テキスト}の学習と結びつく。

読むこと^{テキスト}の分野では、理解の授業であることを明示した授業を継続して実施し、児童・生徒をより複雑な文章と資料に向き合わせなければならない。文章は毎日書かなければならない。文章執筆の状況は、読書、計画の指導、さまざまな科目の必要に応じて、変化しなければならない。

言語^{ラング}の学習は、依然としてフランス語の授業の本質的側面であり、書きことばと話しことばで表現する能力、あらゆる科目における成功、社会への同化の条件となる。また、言語の学習は、これに特化した厳格かつ明快な授業を必要とする。言語の学習には常に注意を施さなければならないが、話しことばあるいは書きことばで表現する場合は、特にそうである。児童・生徒に言語のしくみを考えさせるためだ。知識を構造化するため、特別の授業コマを設ける。特に書くことからなる活動、また言語^{ランゲージュ}を使用するあらゆる活動において、これらの知識の転用が必要な場合はその旨を明示して授業を進める。

文学も同じくフランス語の授業の本質的な部分である。文学は想像力を育成し、世界に関する知識を豊かにし、自己形成に関与する。文学は読まれ、そしてまた聞かれる。文学は書く行為の糧となる。第3学習期では、児童・生徒が自身の経験、読書、知識、とりわけ他の科目からの知識、特に歴史で獲得する知識との関連を通じ、文学テキストを自分のものにするに主眼が置かれる。児童・生徒はますます長く、かつ複雑な作品を読むように導かれる。同時に、自身の好みを刺激するため、個人読書では可能な限り自身の好みに応じて何を読むかを選択することが奨励される。これらの読書は授業時間中の議論の対象となる。

こうして第3学習期は、各学年に設けられた主要テーマに沿って構成された、最初の文学的かつ芸術的教養を提供する。コレッジ第1学年では、補足的テーマ群の選択は教員に任せられる。

小学5・6年では、フランス語の授業は小学校教員の責任に帰する。なので、話しことば、読むこと、書くことからなる活動は授業科目全体に組み込まれる。

コレッジ1年では、この授業は文学とフランス語の専門家であるフランス語教員が行う。他の

すべての授業科目は言語^{ラング}の習熟に貢献する。

鍛成する技能 ^{コンピテンシー}	基盤の領域
<p>話しことばで理解し表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・口頭でのメッセージ、話、説話、あるいは読まれた文章^{テキスト}を聞いて理解する。 ・聴衆を考慮して話す。 ・さまざまな状況下で話し合いに参加する。 ・自身の話に対して批判的な態度を取る。 	1, 2, 3
<p>読むこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・流暢に読む。 ・文学作品^{テキスト}を理解し、自分のものにする。 ・さまざまな文章、資料、イメージを理解し、解釈する。 ・自身の理解を吟味し、自律的な読者になる。 	1, 5
<p>書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すらすらかつ効率よく手書きする。 ・キーボードを使って書く基礎に習熟する。 ・考え、理解するために書く。 ・さまざまな文書を書く。 ・新たな指示をもとにリライトする、あるいは自身の文章^{テキスト}を変化させる。 ・書きことばの規則を考慮し、考えを言葉にし、転写し、再考する。 	1
<p>言語^{ラング}のしくみを理解する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話しことばと書きことばの関係に習熟する。 ・単文の構成要素を識別する、複文において構文を見失わない。 ・文法的つづりを習得する。 ・語彙を豊かにする。 ・語彙のつづりを習得する。 	1, 2

話しことば

第3学習期において、話しことばの学習は、書くことと読むことと綿密に連携しながら継続して進められる。

児童・生徒は話しことばを使って明快かつ手際よく説明する。また情報あるいは見解を発表する。クラスメートと効率よくかつ考えながら議論する。アイデアや言い回しを探すことによって自身の考えを洗練させてゆく。見つけたアイデアや言い回しは、作文や口頭での発表の糧となるだろう。話しことばの習熟は、その狙いを明示した学習を通じて行われる。

話しことばによる表現・理解の領域で獲得される技能^{コンピテンシー}は、書きことばの習熟にも不可欠である。同じく、段階的に書きことばの用法に習熟することは、より行き届いた話しことばの獲得に繋がる。文章^{テキスト}の音読と暗唱は文章理解を助ける。文章の暗記は個々の表現を豊かにする、再利用できる言語形態を児童・生徒に提供するからである。児童・生徒の抽象化能力が広がる一方で、彼らはさまざまな状況を通じ自身の考えを練り、構造化させ、多様な知識を自分のものにする。これらの状況下では、話しことばと書きことばによる表現とそのより明確な言い換えが関連づけられる。

第2学習期同様、教師は話し合いで用いられる言葉の質、正しさに一貫して注意を払う。話し合

いに特化した授業コマ同様、学びのあらゆる機会において、教師は個々の児童・生徒が他者と対話し、相互に言葉をやり取りする（ロールプレイ、規則に則った議論）能力を高めることに留意する。話しことばを使った活動を定期的かつ頻繁に行うことは、話しことばの領域における^{コンピテンシー}技能の構築に不可欠である。これらの活動は、話しことばの学習を第一の目的にしていなくても授業コマでも行われる。しかし、その場合でも生徒が獲得済み、あるいは目下習得中の^{コンピテンシー}技能を駆使することは可能である。また、これらの活動は、話しことばの理解と表現にかかわる^{コンピテンシー}技能を動員する練習に明白に特化した授業でも実施される。これらの特別授業では、児童・生徒は活動の実施基準を尊重し、教師があらかじめ明示した成功基準とは何であるかを識別しなければならない。話しことばの特徴は形に残らないことである。そのため、デジタル機器（オーディオもしくはビデオ）による録音・録画が推奨される。児童・生徒が自身の話しことばを振り返り、また、話しことばを理解する際に、新たに聞き直すことができるからである。

自身の発言の準備をし、補強するために、児童・生徒は話の流れを示す作業用文書（下書き、メモ、プラン、概要、語彙に関するメモ等）と口頭でのプレゼンテーションの補助文書（メモ、ポスター、図表等）を使用する。

^{ラング}言語に関する知識を育成するため、児童・生徒はさまざまな状況下で使われる常套句、言い回し、基本語彙を自分のものにする。これらの表現を使いこなすには、ある程度言葉に習熟しておく必要がある。また、これらの表現により、児童・生徒は話しことばの慣習と書きことばにおけるそれを比較できるようになる。

学習期末に期待される学力
<ul style="list-style-type: none"> ・物語を聞き取り、文章を参照せずに質問に答えることにより、自身の理解を示す。 ・大きな声で文章を暗誦する。 ・メモ、スライド、あるいは他のツール（例えばデジタル機器）を使って、短い口頭発表をする。 ・グループ内で、クラスメートとの話し合いに建設的に参加し、反応や見解を比較検討する。

口頭でのメッセージ、話、説話、あるいは読まれた文章を聞いて理解する	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> 文章、あるいはメッセージを聞き取る際に声、ジェスチャーに関する部分（文や言葉の切り方、アクセントの置き方、イントネーション、似通った音の区別）に注意し、その効果を見つける。 目的に合わせて注意を集中させる。 重要な情報、それらのつながりを識別し、暗記する。これらの情報を暗黙の情報と関連づける。 耳にしたメッセージあるいは文章の領域<small>テキスト</small>に関連するさまざまな種類の言説<small>ディスコース</small>（物語、報告、言い換え、発表、論証等）の特徴的要素、語彙、および文化的レフェランスを見つけ、考慮に入れる。 理解困難な箇所があれば見つけ、その困難を言語化し、対応する方法を見つけ出す。 聞いている言語に対して批判的注意を向ける。 	<p>児童・生徒にとっての状況・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> 聞き取りによるゲームの実施（行動し、理解する等）。 多様な媒体（読み上げられた文章、オーディオ・メッセージ、ビデオ資料、講義形式の授業）から聞く、そしてさまざまな状況下（物語・詩を聞く、言語への感受性を伸ばす、ドキュメント・番組を視聴する、複数の見解を比較検討する、情報を分析する等）で聞く。 耳にした情報を再現する。 音声について練習するため、そして、発言・朗読・番組を視聴・再視聴するために、デジタル録音媒体、関連ソフトを使用する。 理解のために把握した目印（イントネーション、テーマあるいは登場人物の同定、キーワード、繰り返し、論理あるいは時系列上のつながり等）を明示する。 理解していることを示すさまざまな活動：指示の繰り返し、想起あるいは言い換え；情報のまとめ、結論の表明；物語の言い換え、想起；さまざまな表象（絵、演技等）；ノートテイク。
聴衆を考慮して話す	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> 聞いてもらい、理解してもらうために、声と身体が持つ力を動員する スピーチのジャンルに合わせて発言を組織し・形式を整える：適切な形式、言い回し、語彙の活用（お伽話あるいは物語、著作の報告、紹介；資料調査の結果の発表；論拠をもった見解の詳述、説明、正当化、発表等） 文学テキスト（特に詩・演劇）に対して読誦テクニックを使う。 紹介もしくは朗読された文章に対して記憶テクニックを使う。 	<p>児童・生徒にとっての状況・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> 滑舌、話し方、話すスピードの制御、声の大きさ、息つきに関する活動、非言語コミュニケーションの練習：視線、身体の姿勢、手振り、身振り等。 口頭での発言、朗読、芸術作品、映画、スペクタクルへの反応を言葉で表現する。 選択、見解を正当化する。 感動、感情を共有する。 語るためのテクニックの学習、お話を語るトレーニング（グループで、あるいはデジタル録音を使って）。 文章を朗読する準備に関する練習、暗記して文章を誦んじる準備に関する練習。 デジタル録音を使い、文学作品の音声化に向けてのトレーニング。 発表、プレゼンテーション、スピーチをする。 作業用音声、作業用文書（音声下書き、下書き、メモ、カード、概要、プラン等）を使い、行き届いた発言を準備する。 口頭でのプレゼンテーションに使う言葉の素材集（言葉、表現、言い回し）を準備する。 口頭でのプレゼンテーションの支えとなる文書（メモ、ポスター、図表、デジタルのプレゼンツール）の使用。 発表ぶりを改善するための音声録音、ビデオ録画。

さまざまな状況下で話し合いに参加する （一般の授業時間、ホームルームでの話し合いの時間、 即興あるいは準備をした上でのロールプレイ）	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 討論において発言者の多様な意見を考慮に入れ、表明された見解を識別する。 ・ 表明された他の見解（賛同、反駁、補完要素の提出、より明確な言い換え）を考慮しながら、意見、見解を提出する。 ・ 会話の規則（量、質、明快さと簡潔さ、内容との関連）を遵守する。 ・ 話者の責任が関与する表現（拒否を表明できる、要求を表明できる、謝罪を表明できる、お礼が言える）を動員する。 ・ 論証にかかわるさまざまな戦術を動員する：例に訴える、反論する、まとめる等。 ・ 対象となる領域と関連した語彙を展開する。 ・ 自身のスピーチを構築できる（話の内容の構成、文の連なり）。 ・ さまざまな表現方法を動員することができる（語彙、言い回し、文の型等）。 ・ 自身の経験から距離を取り、知識を動員できる（言い回しと言い換え、考え方・内容・手法の説明等）。 	<p>児童・生徒にとっての状況・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ロールプレイ形式による、話者の責任を明確にする表現、および言い回しの使い方のトレーニング。 ・ 意見交換で活用する要素（考え、論拠、言葉、表現、言い回しなどの言葉の材料）を個人で、あるいは数名で準備する。 ・ インタビュー（実際のあるいは架空の）。 ・ 役割分担を決めて行う討論。 ・ 見解を補強するための論拠、見解を例証する例を個人もしくはグループで探す。 ・ 見つかった論拠、例の選別、分類。 ・ 話の構成を記憶する、しかるべき時にアイデアを持ち出す。 ・ クラスメイト同士で討論への参加を準備する（論拠、例、言い回し、動員する語彙、プレゼンテーションすべき内容の順番についての準備；発言に向けてのトレーニング）。 ・ 表明した結論、見解をまとめる。
自身の話に対して批判的な態度を取る	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話し合いを司る規則を練る；クラスメートの発言の中で、規則を守っている箇所とそうでない箇所を見つけ、言い換えの手助けをする。 ・ 口頭でのプレゼンテーションについて全体で練り上げた評価の明確な基準を考慮する。 ・ 話を聞いた後、自身で訂正ができる（言い換え）。 ・ 話しことばの統辞のしくみ（韻律、並置、繰り返しと調整、動詞が占める重要性）と、書き言葉の統辞を比較する。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 口頭でのプレゼンテーションに関する規則、成功基準を全体で作成することに参加する。 ・ 発表、討論、話し合いといった多様な状況においてオブザーバー（《ルールの監視人》）、共同評価者（教師とともに）の立場になる。 ・ 録音・録画を基に、口頭でのプレゼンテーション、話し合いを分析する。 ・ 話しことばのコーパスの収集（教室もしくはロールプレイの状況の録音・録画）と言語の観察。 ・ 話しことばを使うという特殊性を考慮したノート、概要図、デジタル媒体等の形で、発言を準備する。

読むことと書きことばの理解

第3学習期の狙いは読者としての児童・生徒を養成することである。この学習期の終了時には、すべての児童・生徒は、滑らかな音読と黙読に習熟していなければならない。また、そのスピードも理解と解釈の練習を継続できる程度でなければならない。音読と黙読のトレーニングは継続されなければならない。このトレーニングは小学校とコレッジでは毎日行われなければならない。コレッジでのトレーニングは他の科目の実践に支えられる。

読む機会は数多くかつ定期的に設けられる。その媒体は、言語的にも内容の点からも多様にして豊かである。重要なのは文章、作品、資料と児童・生徒を対峙させることである。そしてこれらの

文章、作品、資料は児童・生徒の言語的蓄積、とりわけ語彙を育成し、彼らの想像力を豊かにし、興味を刺激し、知識と教養を伸ばすことができるものでなければならない。

児童・生徒が読者としての能力において自律性を獲得するために、読んで理解する学習は第3学習期も継続される。読むこと、聞くことに関する文章・資料はより長く、複雑になる。この観点からすると、遺産文学・若者向け文学の作品、資料はこの要求に応える最適の読みの教材である。特に第3学習期は、理解のためであることを明示した授業を展開する。個人的用途そして学校での必要に対応するために、児童・生徒に自律した読者としての能力を付与するためである。

学校にいる間、児童・生徒には個人的読書、あるいは楽しみのための読書が奨励される。何を読むかは自由である。児童・生徒は自身の関心・計画に対応する本を定期的に借り出す。これら個人的読書について教室で報告する時間が予定されている。同じくこれらの読書は家庭でも議論される。

第2学習期同様、本学習期を通じ読む活動は相変わらず書く活動と不可分である。この点は、読むことに伴い文書を書くにせよ（自身の反応を記録する読書ノートあるいは読書手帳、詩や作品の抜粋の写し書き）、理解の練習に関連する文章（個人的な印象、言い換え、質問への答え、メモ、概要等）を書くにせよ、文学作品の読解に基づいた文章を書くにせよ、同じである。

読む学習活動は同じく話しことばの強化にも寄与する。それは、朗読された、あるいは語られた作品^{テキスト}を聞き取って理解力を磨くにせよ、表現を込めた朗読を準備するにせよ、口頭で本の紹介をするにせよ、読書から得られた印象を共有するにせよ、あるいは幾つかの作品^{テキスト}の解釈について討論するにせよ、同様である。

最後に、語彙を自分のものにするにせよ、文と文章^{テキスト}のしくみを観察するにせよ、読むことと言語の学習は常に関連づけられなければならない。代名詞による繰り返しや、時制の選択に関しては特にそうである。読むことは書くことにおける観察、模倣そして再学習を可能にしなければならない。

学習期末に期待される学力

- ・ 生徒の年齢に合わせて翻案された文学作品を読み、理解し、解釈する。作品を読んで反応する。
- ・ さまざまな科目の学習のために、作品、資料（文章、表、グラフ、図解、図表、イメージ）を読み、理解する。
- ・ ますます長く、複雑な作品を読み理解する。
 - ・ 小学4年：若者向け文学から5作品と文学遺産から2作品。
 - ・ 小学5年：若者向け文学から4作品と文学遺産から3作品。
 - ・ 中学1年：若者向け文学から3作品と文学遺産から3作品。

流暢に読む	
<p style="text-align: center;"><small>コンピテンシー</small></p> <p>関連知識と技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 頻出単語、不規則単語を記憶する。 ・ 文字を音にする規則を無意識化する。 ・ 読む際に、統辞上の語群、さまざまな句読点を考慮する。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 問題になると判断された書記素・音素に特化した学習活動。 ・ 録音・録画を使ってトレーニングし、自分の読みを聞く。 ・ 毎日全科目で黙読と音読のトレーニング。
文学作品を理解し、自分のものにする	
<p style="text-align: center;"><small>コンピテンシー</small></p> <p>関連知識と技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 意味に到達するために、段階的な読み方をすることができる。 ・ 読んだ文章と、以前の読書、これまでした経験、文化的知識とを関連づけることができる。 ・ 文法と語彙に関する知識を活用することができる。 ・ 読んだ文章（単純過去を使った物語、現在あるいは複合過去を使ったスピーチ、等）における動詞の使用法を通じ、文章に登場する動詞のアスペクト（時制の価値）に関する概念の初歩を学ぶ。 ・ 読むことに関する自身の困難を見つけ出し、どのようにそれを解消できるか、探索できる。 ・ 教室で学んだ多様な読み方を、自律的に使うことができる。 ・ 主な文学ジャンル（お伽話、小説、詩、寓話、中・短編小説）を識別することができる。さらにその主な特徴を見つけ出すことができる。 	<p style="text-align: center;"><small>テクスト</small></p> <p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 以下のことができる学習活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 文章の意味を構築する：明示的な情報を見つけ出す；登場人物、場所、筋の変化、時間的な指標等の識別；暗黙の意味を見つけ出す；論理的連関を見つけ出す；文脈・語の形態・辞書の使用により語彙の意味を明らかにする；デッサン・選択されたイメージ等により、語られた物語を視覚化する； ・ 自身の文章理解を説明する：自身の読書に率直に言及する、実際の経験・以前の読書・個人的教養との関連付け、質問への返答、敷衍、言い換え、段落の見出しの提案、物語の想起、さまざまな種類の表象（デッサン、人形による演出あるいは演技等）。 ・ 自身の読書の印象を共有する、解釈の仮説を立てて討議する、判断を突き合わせる：解釈に関する討論、読書サークル、口頭でのプレゼンテーション、〔解釈上の〕選択の根拠を声に込めて表現する。 ・ 書くことと連携し、読書の共有に関する学習活動、および解釈に関する学習活動準備に向けて：読書ノートあるいは読書手帳、文学に関する掲示等。 ・ 読み終えた本、慣れ親しんだ作品を記憶に留めるためのツール：読書ノートあるいは読書手帳、個人選集、<small>ポートフォリオ</small>イメージ集等。 ・ 幾つかの文学的概念の導入学習：フィクション／現実、登場人物、主人公、メルヘン等、および文学史の文脈化に必要な基本的要素。朗読されたあるいは語られた多様なジャンルの文学的文章全体、あるいは抜粋の聞き取り。 ・ 若い読者の能力に合わせて翻案された理解しやすく、多様なジャンルの文学的文章・作品を自律的に読む。あらゆる科目において黙読、口頭での読み、演技つきの読み等を実施する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の生活環境において利用可能な図書館、図書室を定期的に活用する：クラスで、小学校あるいは中学校で、そして家族で〔読書体験を〕共有する。 ・見知らぬ語彙を理解するための戦略の実施（文脈、形態、〔語彙の〕関連参照世界あるいは関連参照領域に関する知識を想起する）。 ・代名詞と名詞が媒介する繰り返しに配慮し、文章・資料が持つ暗黙の意味に注意を払う。 ・可能であれば自身の解釈あるいは答えを正当化する：文章に依拠する、さらに動員した他の知識に依拠する。
<p>さまざまな^{テキスト}文章、資料、イメージを理解し、解釈する 自身の理解を吟味し、自律的な読者になる</p>	
<p><u>関連知識と技能</u>^{コンピテンシー}</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味に到達するために、段階的な読み方を行うことができる。 ・多様な情報を関連づけることができる。 ・上演される多様なジャンルを識別できる、そして、その主な特徴を見つけ出すことができる。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料の性質・起源を識別する。 ・複数の媒体（文章、イメージ、図、図表、グラフ等）を組み合わせた資料、あるいはハイパーテキストのリンクがある資料の場合、さまざまな情報の関連づけを明確に行う学習。 ・理解を構築するための学習活動：情報の探索、語彙に関する知識の動員、作業用文書（リスト、ノートテイク）〔の作成〕：連結語の探知：同一資料内、あるいは複数の資料間で、明示的あるいは暗黙の情報の関連づけ（干渉）が必要な質問への応答：応答の根拠づけ。 <p>媒体：単純な資料文章、合成資料（文章、イメージ、図表、図、グラフなどが組み合わせられている、例えば、見開きでセットになっている教科書のページ）、図像資料（絵画、デッサン、写真）、デジタル資料（ハイパーテキストへのリンク付き資料、文章・イメージ——静止画像あるいは動画——音を組み合わせた資料）。</p>

書くこと

第2学習期で、児童は筆記体で書く動作の習熟に向けてトレーニングをし、書くことに関するさまざまな作業に向き合った。第3学習期でこのトレーニングは継続される。その狙いは、個々の児童・生徒が書く動作を無意識化し、速さ、書体の質において進歩していることを、教師が確認することにある。〔手で書くトレーニングと〕平行して、キーボードとワープロの使用を継続して学習する。

学びのさまざまな段階で、書くことは思考を育成するために必要である。重要なのは、一人であるいは複数で、多様な媒体を使い、多様な目標を定めて定期的かつ日常的に書く練習をすることで

ある。書く練習は、多様な文学ジャンルの読みと連携して行われる。この練習は、自由かつ自律的に書くことを促進する授業、および作文にかかわるプロジェクトの実施を促進する授業で行われる。児童・生徒は学びのあらゆる段階で書いてみるという習慣を身につける。例えば、読書に反応し感想を記すため、考えるため、求められた課題の準備をするため、結果を文章にしてまとめるため、自身が実現したことを説明しその根拠を述べるため、である。これらの文書は、まさしく勉強の道具としてメモ帳に記されようが、科目別のノートに記されようが、教室で行う勉強の完全な一部である。

第3学習期では、児童・生徒は書く行為にさらにかかわる。そして、要求されている文章の特徴・狙いに一層注意を払う。教室内で行われる見直しと書き直しは児童・生徒に提供される学習活動において大きな重要性を占める。書き直しは、教師の指摘あるいはクラスメートの援助によって、自身が書いた文章へ立ち戻ることと理解できる。書き直しはまた、読んだことのある文章の利用と関連して、新たな指示に基づくこともありうる。最終的にできあがった文章同様、それを書くために児童・生徒がとったプロセスも高く評価される。この目的に向け、執筆過程の段階となる下書き、作業用文書、同一文章の一連のヴァージョン、書き換えが活用される。児童・生徒はこうして徐々に大きな自律性を獲得し、自身が書く文章に対して意識的になる。

作文と言語の学習の関連を打ち立てることは重要である。そのためには、文法・語彙の学習の延長としてフランス語を書く機会、そして、つづりに関する学力を動員して自身が書いたものを見直す機会を提供することが重要となる。

書くことの学習活動において、児童・生徒はつづりに注意を払い、文書作成ツールを使うことを学ぶ。第2学習期で始められたこの学習は、第3学習期にも継続して行われ、児童・生徒が自身の文章を見直す能力において、さらなる自律性を獲得することを目指す。しかし、就学期のこの段階では、児童・生徒の年齢からして、結果にはある程度の誤差範囲が生じうる。それよりも、書くことに関する規則に慣れ親しむことを重視する。

最後に、児童・生徒を励ます教師の肯定的なまなざし、学習意欲を高めるさまざまな学習状況、クラスメート同士の協働が、書く喜び、そして言語^{ラング}及びそのしくみへの興味を生む。

学習期末に期待される学力

- ・読み手に対応した1頁から2頁の文章を書く。
- ・見直しの後、構成が整い、一貫し、文字が判読可能で、学習期間中に学んだつづりの規則に則った文章を書く。

すらすらかつ効率よく手書きする キーボードを使って書く基礎に習熟する	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> 定期的なトレーニングを通じ、筆記体で書く動作を無意識化する。 さまざまな種類の文書のレイアウトを守りながら、清書する速さと能率を高める。 <ul style="list-style-type: none"> キーボードとワープロを系統的に使う。 キーボードで書くことに関する基本に習熟する。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> 書くことに関する動作の段階的トレーニングを必要とする児童・生徒への学習活動の提供。 文章の清書、レイアウトのトレーニング：暗記すべき詩・歌、まとめとレジュメ、教室で参照するツール（図、通知文、保護者へのメッセージ、個人的な文章の執筆、図表等）。 時間差筆写〔短い例文を暗記、その後に例文を隠して筆写、例文を忘れていたら例文を参照、例文の参照回数を教師に報告〕、語記転写〔手本をクラスに提示、全員が語記したら手本を隠して筆写〕、裏面筆写〔裏面に書いてある手本を教師が音読後に筆写〕、引っ繰り返筆写〔手本は児童・生徒の背後あるいはノートの裏面に貼付、暗記後に筆写〕等 つづり・語彙と連携して、筆写による単語の暗記方法についての説明。 キーボードで書くトレーニングとなる学習活動。 コンピュータ上での筆写、転写、レイアウト。
考え、理解するために書く	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <p>勉強のための文書</p> <ul style="list-style-type: none"> 読書の感想を言葉にする。 仮説を立てる。 アイデアをリストアップし、関連づけ、階層化する。 より明確に言い換える。 暫定的な結論を練る。 レジュメを書く。 <p>考察的文書</p> <ul style="list-style-type: none"> 考え方を説明する。 答えを根拠づける。 発言を論拠づける。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <p>勉強のための文書／学ぶための文書</p> <p>勉強のための文書は、書くことの学習に直接奉仕するものではない。この文章は試行を重ねることによって、知識を身につけることに貢献する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自律性と想像力を育成する指示を出して定期的に行うトレーニング。 定期的の下書き用ノートを使う。あるいは、生徒のノートにこの種の文書用スペースを設ける。作家手帳、思考手帳、実験手帳、読書日誌等。 必要を感じている児童・生徒に対し、書きたいと思わせる働きかけをする、あるいは書き始めの障害を取り除く（教員と児童・生徒との間でチョークを手渡し）。 あらゆる領域（理科、歴史等）で短い文書を頻繁かつ定期的に執筆する。それぞれの科目に固有の取り決めを明示する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・学びのさまざまな段階で書いてみる： ・発見の段階で、印象を集め、自身の理解を報告し、仮説を言葉にするために書く。 ・授業中、質問に答えるために、事実・アイデアを拾い上げ、階層化し、関連づけるために書く。 ・構造化の段階で、より明確に言い換え、まとめ、要約するため、あるいは暫定的な結論を練るために書く。 <p>考察的文書／考えるための文書、そして自身の考えをさまざまな形で展開し、組織するための文書：執筆された文章、図表等。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理科における実験ノート。 ・作品の解釈をめぐって討論を準備するための文書。
<p>さまざまな文書を書く</p>	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・執筆すべき多様なジャンルの文書の主な特徴を知っている。 ・文章執筆に関する考え方を実行に移す（指導を受けながら、それから自律的に）。参照するカテゴリー、言葉の素材（既知のあるいは要求された文書に合わせて準備した語彙と構文）を決める、アイデアを見つけ、組織する、文を練る、文を整合的に繋げる、段落あるいは他の文章組織の形態を練る。 ・教室で使える言語学習のツール（言葉の素材、正しいつづりを書くためのツール、再読のためのガイド、オンライン辞書、ワープロ、スペルチェッカー）を動員する。 ・言語についての自身の知識（単語のつづりに関する記憶、一致の規則、句読点、組織語等）を動員する。 ・作文に使う動詞の用法（物語で使う単純過去、スピーチで使う現在もしくは複合過去）を通して触れられた、動詞のアスペクト（時制の価値）の概念の初歩を学ぶ。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <p>短い文章</p> <p>短い文章とは、執筆の目的が明確で、1行から10行からなる、児童・生徒個人による文章である。短い文章は多様な形を取りうる：創作文、論証文、模倣文、いずれもその目的は児童・生徒が自身の書き方を定めるのを援助することである。短い文章は学習単元〔セカンス〕の文化的かつ文学的テーマに関連する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書く習慣：手本、形式的制約、さまざまな媒体（文章、イメージ、音）、感受性・想像力に訴える状況等の役割を果たす複数の文章を起点とする。 ・文法、語彙の学習の延長として作文する状況。 ・下書き、概要図等を使いながら書く準備をする。 ・書くことが含意するさまざまな側面を無意識化するトレーニング課題：遊戯的かつ創造的文書（例：リポグラム〔特定の1文字または数文字を避けて作る文〕、アナグラム等）、さまざまな読み手に向けた文書（クラスメートに自身が見た映画を語る、新聞のためにその映画の要約をする等）。 <p>長い文章：読むことと連携した、より大規模なプロジェクトの枠組みで行う。文章を書く計画は長期間にわたって指導され、学習単元もしくはプロジェクトを方向づける。</p>

新たな指示をもとにリライトする、あるいは自身の文章 ^{テキスト} を変化させる	
<p>関連知識と技能^{コンピテンシー}</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書くことを時間の流れに刻まれたプロセスと考える。 ・自身が書いた文章から距離を取って評価する。 ・よりの確かな言い回しを探し、〔自身が書いた文章を〕より充実させる。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書く活動を幾つかの時間に分ける：最初のバージョンを教員の指導を受けながら省みることで、より充実させる。 ・新しい指示のもとで書く実験をする（視点の変化、新たな登場人物の導入等）。 ・二人であるいはより大きなグループで作文を分担。特にデジタル機器を使用。 ・特に、教師が提供する手段を用いてクラス全体で書かれた文章の改善点を探す。
書きことばの規則を考慮し、考えを言葉にし、転写し、再考する	
<p>関連知識と技能^{コンピテンシー}</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一貫性とまとまりを尊重する：語順、発話、文章の統一性を確保する意味的要素： <ul style="list-style-type: none"> ・論理、時間にかかわる接続語、代名詞などによることばの受け直し、時制を駆使してことばの機能不全を避ける。 ・段落という概念、さまざまなジャンル・タイプの文章に固有の文章組織の形式を考慮する。 ・句読点（有用性、使用法、文章の意味への関与）の打ち方、語順（意味のまとまりとしての文）についての知識を動員する。 ・書きことばの規範をまもる <p>言語の学習と連携し、文法にかかわるつづりについで知識を動員する：主語と動詞の一致；時制に応じた動詞の形態変化；名詞と限定辞・冠詞の一致；主語と属詞の一致。</p> ・語彙に関するつづりの知識を活用する、そして、自信のない単語のつづりを確認できる。 ・まずは教師の指導を通じ、その後は一人で、間違い可能性ある領域を識別することができるようになる。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章を書いた生徒自身あるいはクラスメートが行う、音読による再読。 ・同じ指示に対応して書かれた文章の比較。 ・読むことの学習と連携して、文章の統一性、一貫性を担保している要素の探索。 ・書くこと・文法・つづりの間にある強い連関を築くための、適切な言語学習の授業。 ・単語のつづりを確認するために使用できるツールの作成と使用。 ・スペルチェッカーの使用。 ・点検を容易にするための、下線、枠囲み、矢印、カテゴリー別マークの使用。 ・クラス全体でつづりの間違い表を作成する（文章を分析して単語を書く）。 ・クラス全体で文章の訂正もしくは変更を行う（文章は映写する）。 ・項目を定めての再読（言語の学習で学んだつづり、形態変化あるいは語順に関する項目について）。

言語^{ラング}の学習（文法、つづり、語彙）

第2学習期では言語についての知識の最初の構造化が果たされた。これを受け、第3学習期は、文章の理解と作文に役立つ、明示的かつ反省的な言語の学習が始まる。重要なのは、幾つかの中心的概念を軸に堅固な文法知識を確保し、言語の学習に対する児童・生徒の関心を喚起することである。この言語の学習はコーパス、収集された事例、児童・生徒による文章・発言に基づいて行われる。

言語の学習に特化した授業では、児童・生徒が目にした文章と耳にした発言への注解、児童・生

徒が書いた文章の添削・講評が行われなければならない。その目標は〔フランス語の〕規則性を明らかにし、その言語システムの検討を開始することにある。

つづり（単語のつづりと、形態変化によるつづり）の獲得には特に力を入れる。この学習はまず、言語システムの規則性を明らかにすることを目指して指導される。同様に、動詞の形態変化の学習も、人称と時制の標識^{マールク}の規則性に基づいて行われる。

文のしくみを段階的に発見することにより、文の主要構成要素が簡単かつ明快に理解できるようになる。なお、文の構成要素は第4学習期においてより深く分析する。

言語の学習は第2学習期同様、比較、変形（代入、移動、追加、削除）、選別、分類を可能にするコーパスに依拠して行われる。規則性を識別するためである。不規則な、そして例外的な現象は授業の対象にはならない、しかしそれらが言語の使用の中で頻繁であれば、暗記するよう努力する。語彙はその学習に特化した時間帯において、明らかに観察・分析の対象となる。同じく語彙は、読むこと、そして書きことばあるいは話しことばによる表現のさまざまな学習活動、またさまざまな科目において、文脈の中で学ぶこととする。同様に、語彙の学習は単語のつづりの学習、および特に動詞を含む構文に関する統辞の学習と連携する。

学習期末に期待される学力
<ul style="list-style-type: none"> ・多様な状況で行われる作文で、名詞句における一致（限定辞、名詞、形容詞）、主語と動詞の一致の単純なケース（主語が動詞に先行し、しかも動詞の近くにある。主語は多くとも形容詞一つと名詞の補語一つを含む名詞句からなる。二つの名詞からなる主語。動詞の後に倒置された主語）、および主語と属詞の一致に習熟する。 ・理性的に推論し、文脈における単語の意味を、語形変化に依拠しながら分析する。 ・単文・複文において主要構成要素を見つけることができる。

話しことばと書きことばの関係に習熟する	
<p style="text-align: center;"><small>コンピテンシー</small></p> <p>関連知識と技能</p> <p>習熟すべきこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フランス語の音素全体とそれに対応する書紀素。 ・書きことばと話しことばにおける、性数変化と形態変化の標識（名詞、限定辞、形容詞、代名詞、動詞）。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つづりを音に変換する規則の解読に依然として困難を抱える児童・生徒に対して：音素と書紀素の対応を強化する学習活動。 ・単語のつづりと、形態変化によるつづりにおける書紀素の役割を明確にする活動（観察と分類）。 ・単語の同形異義および文法上の同形異義の現象を意識し、理解する。また、これらの幾つのケースについては、文脈による同形異義語を認識する活動（観察、分類）。

単文の構成要素を識別する 複文において構文を見失わない	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・品詞と機能の概念を理解し、それに習熟する。 ・単文の構成要素を識別し、階層化する。 <ul style="list-style-type: none"> ・主語についての知識を深める（複数の名詞あるいは名詞句によって形成される主語、倒置された主語） ・補語を区別する：直接目的補語、間接目的補語、時間・場所・理由の状況補語。 ・主語の属詞を識別する。 ・名詞句の分析：付加形容詞と名詞の補語の概念。 ・品詞を区別する。 注意：名詞、冠詞（定冠詞と不定冠詞）、形容詞、動詞、主語人称代名詞、不変化語は第2学習期で確認済み。 ・限定辞：所有および指示限定辞。 ・目的語人称代名詞。 ・副詞。 ・前置詞（前置詞に導かれる名詞句）。 ・最も頻繁に使用される等位接続詞と従位接続詞（quand, comme, si, que, lorsque, parce que, puisque 等）。 ・3つの文のタイプ（平叙、疑問、命令）と否定形、感嘆形についての知識を深める。 ・節の概念から出発して、複文と短文を区別する。 ・複文中、節のさまざまな連結法を見つけ出す：並置、等位、従位の概念。 ・等位接続詞と従位接続詞の使い方の違いを理解する。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文の組み立て：文の拡大と縮小。 ・文法的に正しい文の作成と分析。 ・単語と統辞グループ〔句〕の語順の観察と分析。 ・補語の場所に位置する名詞句の探索、および削除、文頭への移動、代名詞化の操作による特徴の確認（目的補語と状況補語の区別）。 ・単文の論理的分析。 ・文法ゲーム（創作的ゲーム、仲間外れ探し、自身が書いた文章を起点とした変形ゲーム等）を日常的に実施。 ・意味上の効果を評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・定冠詞／不定冠詞の選択によって生まれる効果。 ・修飾する形容詞の、名詞に対する位置によって生まれる効果等。
文法的つづりを習得する	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・変化が生じる品詞を識別する：名詞と動詞；限定辞；形容詞；代名詞。 ・名詞句の概念、および名詞句内での一致の概念を知る。 ・倒置文の場合も含め、動詞と主語の一致に習熟する。属詞と主語、動詞 être と過去分詞の一致（最も頻繁なケース）に習熟する。 ・規則性に基づいて、言葉のしくみのルールを練る。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・文の資料集の観察から出発して： <ul style="list-style-type: none"> ・規則性を明らかにできる分類と推論の学習活動。 ・統辞の操作（例えば代名詞による代替、拡大等）。 ・規則性を定着させ、単純な一致を無意識化するためのトレーニング。 ・書くことに関する再学習の学習活動（的を絞った再読、一致の連鎖の具現化、推論を言葉で表す等）。

<ul style="list-style-type: none"> ・動詞を認知する（幾つかの手法を使う）。 ・3つの動詞グループを知る。 ・時制と人称の標識の規則性を知る。 ・以下の動詞について、直説法の現在形、半過去形、未来形、単純過去形、複合過去形、大過去形、条件法・命令法の現在形を暗記する： ・être と avoir。 ・第1・2群動詞。 ・第3群の以下の不規則動詞：faire, aller, dire, venir, pouvoir, voir, vouloir, prendre。 ・単純時制と複合時制を区別する。 ・過去分詞の概念を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動詞のすべての単純時制を比較・選別することにより、以下の点を明らかにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・人称の標識の規則性（語尾の標識）。 ・時制の標識の規則性（直説法の半過去、未来、単純過去、現在、条件法の現在、命令法の現在）。 ・複合時制の組み立て。 ・形態上の類似による動詞の分類（3つの群）。 ・文の資料集を出発点に、動詞の語末音 /E [エ] / の観察と分類；第2群動詞あるいは第3群動詞による代替の実施。 ・すでに読み、学び、あるいは書いた文章を出発点に、使われている時制の観察と識別。時制を変えての書き直し。つづりに現れる影響の言語化。 ・話しことばあるいは書きことばによる表現の領域で、異なる時制を試す。産み出された効果へ注意を喚起。 ・つづりに用心することを促す、さまざまな形の書き取りを定期的に行う。
---	---

語彙を豊かにする

<p>関連知識と技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文学・芸術的教養に関する指導要領と連携し、読書を通じて自身の語彙を豊かにする。 ・紙あるいはデジタルの辞書、もしくは他のツールの使用を通じて自身の語彙を豊かにする。 ・書きことば・話しことばにおいて、学んだ語彙を適切に再利用できる。 ・複雑な単語の形成を理解する：派生・合成による。 ・主な接頭辞の意味を理解する：ラテン語・ギリシア語の語根を発見する。 ・単語を言葉のネットワークの中で関係づける（語族、語彙場による分類）。 ・同義語、反意語、同形異義語、多義性の概念を知る。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読むことにおいて、文脈、単語の形成をたよりに未知の単語を理解するトレーニング。 ・書くことにおいて、単語もしくは慣用句の事前探索。 ・読み終わった文章・資料、およびクラスの状況から出発して、単語・慣用句のネットワークの構築。 ・同じ動詞からなる構文の比較（例えば、「植物が成長する (la plante pousse)」と「ポールはリュシーにミスさせる (Paul pousse Lucie à la faute)」）、および動詞の応用（例えば「～を使って遊ぶ (jouer avec)」, 「～をする (jouer à)」, 「～にとって意味を持つ (jouer pour)」）。
---	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・形式の観察・操作から行う学習活動, および語彙に関する知識の分類・構成から行う学習活動(語彙の関係図, 図表, 単語の収集等)。 ・カード, 手帳, 掲示物等の制作。 ・読むこと, 書くこと, 話しことばにおいて, 新しい単語との出会い, あるいは既習の単語・慣用句の再利用を促す状況。 ・動詞の名詞化による言い換えの練習(例えば, 王が権力の座に着く/王の権力への到達)。 ・紙およびオンラインの辞書の使用。
<p>語彙のつづりを習得する</p>	
<p>関連知識と技能 <small>コンピテンシー</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法で学んだ不変語のつづりを暗記する。 ・規則性, 形成に基づいて学んだ語彙を暗記する。 ・単語の形成・語源に基づいて, つづりの目安を身につける。 	<p>児童・生徒にとっての状況設定・活動・道具の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無意識につづりを書けるようにするための操作, 再学習。 ・規則性の観察, リストの作成。 ・最も使用頻度の高い単語を見つけるため, 使用頻度リストを利用し, かつそれらの単語のつづりに慣れ親しむ。 ・書記法の暗記を助けるための聞き取り, 文章作成。
<p>使用用語 種類(あるいは文法上クラス)/機能。 普通名詞, 固有名詞/名詞句/限定辞(定冠詞, 不定冠詞, 所有形容詞, 指示形容詞)/形容詞/代名詞/副詞/等位接続詞と従位接続詞/前置詞。 主語(動詞の)/直接目的補語/間接目的補語/主語の属詞/状況補語/名詞の補語/付加形容詞。 動詞: 群一語幹一時制の標識—人称の標識/語尾/直説法(単純時制: 現在, 半過去, 単純過去, 未来; 複合時制: 複合過去, 大過去) // 条件法(現在) // 命令法(現在) // 過去分詞。 単文/複文; 文の型: 平叙, 疑問および命令文; 否定形, 感嘆形。 節, 並置, 等位, 従位。 語幹, 接頭辞, 接尾辞, 同義語, 反義語, 同型意義語, 多義性</p>	

文学・芸術的教養

第3学習期では, 何を読むかの選択, および関連して行われる書くことと話しことばの活動は, 授業科目の最終目標を明確にする主要テーマから構成されている。ただし, これらのテーマ自体は, 学習対象や教育内容にはならない。

以下の表では, これらのテーマには文学的な狙い, そして人間形成に関わる狙いを詳らかにした指示が添えられている。コーパスに関する指示により, 教師は年間学習計画における文学ジャンル・文学形式間のバランスを担保できる。これらの指示は, 共通の教養の構築を助成する上で, 避けては通れないポイントを定めている。また, これらの指示は他の芸術領域への入り口を提供し, 異なる科目間で行われる共通の学習に有益な関連を打ち立てる。

小学4・5年では, 2年間を通じ, ジャンル, 文学形式, 表現方法(文章のみ, 絵本・漫画については文章とイメージ, 映画については動くイメージ)が多様化するよう, そして読書の難度・量については進度を設定するよう留意する。複式学級では, すべての児童に同じ作品を与えることが

できる。ただし、小学4年では異なる読みの道筋を設定し、生徒の成長に合わせて質問の内容を変えることが必要である。テーマは教師の選んだ順番に従って学ばれる。同じ作品、あるいは複数の文章からなる文章群が二つのテーマに属するケースもありうる。その場合、これらの作品・文章群は個々のテーマ固有の問いに応じて、異なる方法で学ばれる。

コレージュ1年では、教師が選んだ順序に従いテーマを学ぶ。個々のテーマは、異なる問題設定あるいは異なる優先事項に従い、学年を通じ数回にわたり、あるいは異なる機会に取り組みされる。学習に知的一貫性を担保しようとする配慮、生徒の教養を拡げ深める目標、生徒の趣味を養い、彼らの興味に配慮して読書を多様化させる野心を実現するには、いずれにせよ、これらの目標に合わせたリズムのもと、幾つかの期間からなる年間教育計画を立てる必要がある。作品の選択にあたっては、教師は小学4・5年で生徒がすでに読み・学んだ作品を考慮する。

コレージュ1年で学ぶべき作品の総体は、通読の対象となる作品によって補完される。通読作品は、学習指導要領全体の展望および他科目との計画を勘案して、教師が選択する。通読作品は多様なジャンル、形式、表現方法から構成される。また、若者向け文学に属するものでもよい（小説、演劇、詩集、お伽話・短編小説集、絵本、漫画本）。作品はフランス文学、フランス語文学、外国文学、地方文学から選び、選択が多様になるよう留意する。こうすることによって、生徒の関心を世界の文化の多様性に向ける。

小学4・5年

	ヒーロー／ヒロインと登場人物	道徳を問う	驚異なるもの・奇妙なるものと対峙する。	冒険を生きる	世界を想像し、語り、讀える	他者との関係を通じ、自己を発見し、自己の立場を明確に示す
文学的狙いと人格形成に関わる狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒーロー／ヒロインの典型・特徴が明確に描かれている、あるいはそのように見えるヒーロー／ヒロインが登場する作品・文章・資料を発見する。 ・ヒーロー／ヒロインの特徴である美点・価値を理解する。 ・ヒーロー／ヒロインが持つ社会的・文化的価値と人間的美点、読者による同一化、可能な自己投影について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・司法、差異の尊重、権利、義務、環境の保全といった、社会の幾つかの根本に問いかける物語、自伝・評伝、寓話、絵本、演劇作品を発見する。 ・登場人物が担う道徳的価値と彼らの行為の意味を理解する。 ・問われている価値について考え、定義する、さらに、社会で生きるうえでこれらの価値の間に生じる緊張について考察し、定義する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お伽話集、神話を翻案した絵本、日常から外れた登場人物、超自然的人物像が登場する演劇作品を発見する。 ・彼らが象徴するものを理解する。 ・これらの人物が喚起する快び、恐怖、魅力、嫌悪について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主要登場人物が生徒に近い存在（例えば子供、あるいは動物）である冒険小説を発見する。読書への最初の取り組みを支援するためである。 ・物語の運動、登場人物、彼らの関係を理解する。 ・サスペンスの様式について考え、可能な語りを想像する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな文化に属し、起源を語る詩、お伽話、祝福の言葉を発見する。 ・世界を語り、人間存在と自然の関係を表現し、世界の起源について夢想する ・詩的言語（ジャンルの概念を厳密に受け入れる必要はない）の性質について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供が家族生活、子供同士の関係、学校あるいは他の社会グループに登場する教養小説的物語を発見する。 ・フィクションにおける真実の部分を理解する。 ・人間について学ぶとはどういうことなのか、それにはどのような困難が伴うかを考察する。

資料体の指示	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒーロー／ヒロインが登場する若者向け文学、あるいは遺産文学の小説（全編通読） <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・典型的なヒーロー／ヒロイン、もしくはありふれた登場人物がヒーロー／ヒロインになってゆく物語、お伽話もしくは寓話 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・典型的なヒーロー／ヒロインが登場するマンガ本 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・典型的なヒーロー／ヒロインが登場する複数の映画の抜粋、もしくは一本の映画。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者向け文学もしくは遺産文学の小説（全編通読） <p>さらに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳・市民教育の指導要領、および／あるいは小学5年の歴史の学習指導要領テーマ2⁴と関連する絵本、知恵を教えるお伽話、自伝・評伝。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳上の問題を投げかける寓話、社会問題への関与を表現する詩もしくは歌。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者向け文学の演劇作品一編。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵画、彫刻、イラスト、マンガあるいは映画による表象と関連し、驚嘆すべきお伽話、あるいは神話的小説とお伽話と伝説（全編通読） <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フランス、そして他の国々、文化に属するお伽話と伝説。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神話的物語を翻案した一冊もしくは複数の絵本。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者向け文学の演劇作品一本。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者向け文学の冒険小説一編（全編通読）。主人公は子供か動物であること。 <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な時代のさまざまな古典的冒険小説の抜粋。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マンガ 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・詩集一冊。 <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界を祝福する、そして／あるいは、詩的言語の創造力を証言するさまざまな世紀の詩。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな文化に属し、世界の起源を語るお伽話。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者向け文学あるいは遺産文学に属する教養小説一編。 <p>そして</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な時代のさまざまな古典的教養小説、もしくは自伝的小説の抜粋 <p>もしくは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな映画の抜粋、もしくは映画全編、可能な限り学習した作品の翻案であること。 <p>もしくは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人的感情を表現した詩。
--------	---	--	--	--	--	---

⁴ 小学5年の歴史地理学習指導要領において、「テーマ2」は以下のように規定されている。「フランスにおける工業の時代：《エネルギーと機械》、《鉱山、工場、工房、アパートにおける労働》、《工業都市》、《農村世界》」。Ministère de l'éducation nationale et de la jeunesse, *Programme du cycle 3, en vigueur à compter de la rentrée de l'année scolaire 2018-2019*, 2019, p. 79.

中学1年

	人間的なるものの 臨界点としての怪物	冒険小説	創造に関わる物語, 創造に関する詩	自分より強いものに反抗する: 策略, 嘘, 見せかけ
文学的狙 いと人格 形成に関 わる狙い	<ul style="list-style-type: none"> ・怪物の人物像が登場する作品, <small>テキスト</small>文章そして資料を発見する。 ・怪物の描写もしくは表象, 怪物 同士の対決を描く物語・演出が 喚起する強い情動を理解する。 ・怪物がイメージさせ, かつ踏査 させる人間的なるものの限界に ついて考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品そして文章が表象する世 界, それらが語る物語によっ て, 読者をハラハラドキドキさ せ, 読書へ引きずり込む作品・ <small>テキスト</small>文章を発見する。 ・なぜ, 物語が読者の注意を捉え, 読者を離さないのかを理解す る。 ・これらの作品・<small>テキスト</small>文章・物語を読 むことがなぜ面白いのか, その 理由について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな文化に属し創造に関 連する多様な物語, 世界を祝福 する詩, そして/あるいは詩的 言語の創造力を表す詩を発見す る。 ・いかなる点において, これらの 物語, 詩的創造が本質的な問い に答えているのか, いかなる点 において, これらは世界という 概念の証言になっているかを理 解する。 ・これらの文章の地位, これらの <small>テキスト</small>文章が表現する価値, その差異 と類似について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・弱者がより強い者たちに抵抗す るために考えだす策略・遠回し の作戦を語る, さまざまなジャ ンルに属する<small>テキスト</small>文章を発見する。 ・知恵の策略がどのように産み出 され, 展開されるか, そして読 者や観客にどのような効果をも たらすかを理解する。 ・策略の目的, 意味, 筋立ての概 念, 争点となっている価値につ いて考察する。

<p>資料体の指示</p>	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・怪物の人物像が持つ様相の幾つかを発見できる絵画、彫像、オペラ、漫画、あるいは映画といった資料と関連づけながら、『オデュッセイア』および／もしくは『変身物語』を学ぶ。翻訳の選択は教師による。 <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・驚嘆すべきお伽話、神話を翻案した物語、古代の伝説あるいは、フランスおよび他の文化・国の伝説。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな時代に属する小説および短編小説の抜粋。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古典的冒険小説（全編通読）。 <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な時代、異なるカテゴリーに属するさまざまな古典的冒険小説の抜粋。 <p>あるいは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数の冒険映画の抜粋、もしくは一本の冒険映画。可能な限り学習した、あるいは授業外通読の対象として生徒に課した本の一冊を翻案した映画。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史の学習指導要領（テーマ2：《紀元前1000年の古代地中海における信仰と文明の起源に関する物語》⁵⁾）との関連において、『聖書』から『創世記』の長文抜粋（全編通読）。 ・他の文化に属し、創造に関連する重要な物語の幾つかから、重大な意味を持つ抜粋。抜粋は比較可能な形で選ぶこと。 <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界を祝福し、さらに／あるいは詩的言語の創造力を証言する、さまざまな世紀に属する詩。 	<p>以下を学ぶ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・策略と権力関係に基づいた筋立てを展開する寓話およびフェアリー、ファルスあるいは阿呆劇。 <p>および</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一編の演劇作品（古代から現代）あるいは、同一タイプの主題を扱った映画（全編読解もしくは全編学習）。
---------------	--	--	---	--

⁵⁾ 中学1年の歴史地理学習指導要領において、「テーマ2」は正しくは以下のように規定されている。「紀元前1000年の古代地中海における起源に関する物語、信仰と市民権：《ギリシアの都市国家世界》、《ローマ、神話から歴史へ》、《多神教世界におけるユダヤー神教の誕生》」、Ibid., p. 80.

すべての授業の交差点

第2学習期同様、第3学習期では、話しことばによる表現、書きことばによる表現、そして読むことは、すべての授業時間および集団生活のあらゆる瞬間に必要な不可欠である。これらの授業時間・機会は、児童・生徒の注意が言語活動的側面あるいは言語的側面に向けられれば、繰り返しのより、真のトレーニングの機会となる。

小学4・5年では、フランス語の授業全体が小学校教員の責任に帰する。そして時間割は、1週間に12時間の割合で話しことば、読むこと、書くことの学習活動が、統合されて毎日実施されることを想定している。

コレージュ1年では、当該科目に割り当てられた週当たりの時間数が小学校よりも限定されていることを考慮して、フランス語担当教師はフランス語の話しことば、読むこと、書くこと、さらに言語の学習の分野において、科目の特に文学的な側面を担当する。

それ故、十全に話しことばへの習熟を育成し、読むこと・書くことに関する^{コンピテンシー}技能の構築に自身の担当科目が貢献しうる要素を、学習指導要領の中から識別することは、コレージュの個々の教師の責任である。さらに、自身の担当科目固有の言語習得（語彙、特別な言い回し）に配慮することも教師の責任である。話しことばおよび書きことばでの表現に関する^{コンピテンシー}技能を活用する学習状況を厳格かつ定期的に設定することにより、それぞれの科目に固有の知識と概念の錬成が可能となるはずである。

話しことばは、道徳・市民教育と関連する話し合い、考え方の説明、知識・解釈（^{テキスト}文章、イメージ、実験をめぐって）をめぐる討論、本などの紹介、プレゼンテーション、論拠に基づいた討論において育成することができる。話しことばは、体育スポーツでも練習できる。この科目では、行われた行動を記述し、パートナーと話し合うために、時宜にないかつ正確な語彙の使用が要求されるからである。

あらゆる科目は読み、書く機会を提供しうる。読むことにおいては、補助教材は一連の^{テキスト}文章、あるいは文章からなる資料、関連する挿絵、表、概要図あるいは、伝統的媒体もしくはデジタル媒体で提供された他の形態の書きことばから構成される。

小学4・5年では、児童は文学的、科学的（数学、人文科学、生命と物質の科学）、芸術的あるいは科学技術的文章の基本的特徴と特性を識別できる。コレージュ1年では、個々の科目、とりわけ歴史・地理と科学で使用される文章と資料の読みにも固有の^{コンピテンシー}技能は、頻繁かつ定期的に学習される。これらの学習機会では、読みの目的に応じた戦略が明示的に教えられる。

書くことに関しては、小学4・5年では、少なくとも毎日1コマの授業が文章を書く機会（あるテーマについて考えて文章を書く）であるべきである。コレージュ1年では、生徒は多様な文章、そしてさまざまな科目に固有の^{テキスト}文章を執筆するように指導される。これらの^{テキスト}文章を執筆するのに必要な^{コンピテンシー}技能は、定期的に明確に説明・練習する。

文学・芸術的教養のテーマは、歴史、芸術史、道徳・市民教育の学習指導要領が会うための最適な場を提供する。

単に情報探索に留まらず、これらの情報を処理し、自分のものにするには、読むこと・書くことに関する^{コンピテンシー}技能の育成と連携しながら、個別の学習対象となる。コレージュ1年では、とりわけ司書教諭が他の科目の要求と連携しながら、これらの学習を担当する。

第2学習期同様、長期間にわたる野心的なプロジェクトは第3学習期でも学習期全体を通じ、書きことば・話しことばによる表現、読むこと、芸術活動および／あるいは他の科目を連携させることができる。例えば、挿絵のある本の刊行を含む書くことに関するプロジェクト、作品のフランス語あるいは学習中の言語への音声化（語りあるいは歌）、校外見学・資料検索を行いながら準備した個別の学習成果を報告する展示プロジェクト、オンラインでの発表プロジェクト等、である。